

2026年に入り、Chat GPTやGeminiなどの生成AI（学習したデータを基に、文章、画像、音声、動画などの新しいコンテンツを新しく作り出すことができる人工知能）の進化が、とんでもないスピードになっている。少し前までは、「便利なチャットツール」や「高性能な検索エンジン」くらいに思っていたのに、今やAIが自ら考えて動く「エージェント」へと進化し、我々の現実の仕事や生活にどんどん入り込んできた。

実を言うと、私自身もこのコラムの構想を練るに当たり、このAIを「壁打ち相手」として活用している。

長年、自らの言葉で紡いできたこの「団塊耕志録」を、AIに手伝ってもらうことに、最初は少し後ろめたさもあった。しかし、膨大な時間を節約し、浮いた時間で自らの思考をさらに深め、現場の課題に向き合えるのであれば、これほど頼もしい「軍師」はいない。もちろん最終的な責任はあくまで自分にあると肝に銘じつつ、この賢い相棒と向き合っている。

人類史上かつてないこの激変の波を、どう受け止めるべきか。私なりに「3つの次元」で整理し、考えてみた。

第一の次元：個人の實務レベルでの変化

第一の次元は、個人の實務レベルでの変化だ。世間では次々と新しいAIツールが話題になり、目移りしそうになるが、私が個人的に一番期待しているのは、自社でも長年インフラとして使っている「Google Workspace」（ビジネスのデジタル化を支援するツール）と連携する「Gemini Spark」（ユーザーがパソコンやスマートフォンを閉じている間も、クラウド上で自律的にメールの整理やスケジュール調整、資料作成などを実行するAIツール）である。いよいよ日本版も本格的に使えるようになるようだが、これは単なる流行りのツールではない。私が日頃から最も苦手としていた膨大なメールのチェックや、過去のやり取りの文脈を踏まえた的確な返信の文案作成、さらには関係者のスケ

清野吉光氏のコラム 第187回

団塊耕志録

清野 吉光（きよの よしみつ） 略歴

1950年 長野県四賀村生まれ、印刷関係など様々な職業に従事。1976年 清水市の日の丸交通入社。1980年 静岡市内の事務機器センターに入社。1982年 システムオリジンを仲間と創業、専務取締役。1992年 代表取締役社長就任。2016年3月 システムオリジン社長退任。クリアフィールド取締役。2021年5月 一般社団法人静岡TaaS代表理事に就任。2025年1月（株）静岡TaaSトラベル設立



2026年、AI激変の波をどう受け止めるかー3つの次元とAGIへの期待ー



清野吉光のコラム
団塊耕志録
ブログ（過去記事）

ジュール調整などを、AIが見事にこなしてくれるのだ。情報の分断がなくなり、すべてがシームレスに繋がる。これはもう「自社の事情を熟知した超優秀な秘書」が常に横にいてくれるようなもので、日々の事務的なストレスが劇的に減る。

さらに「Google Assistant gravity」（AIエージェントがタスクの計画からコード実装、テスト、デバッグまでを自律的に遂行する仕組みを備えるAI開発プラットフォーム）のような開発環境を使えば、プロのエンジニアでなくてもAIのサポートを受けながらコードを生成し、システムを作る時代になった。

私が代表を務める、静岡TaaSのような小規模な組織でも、多額の資金を投じることなく、自前でシステム化が進められる道が開けてきたのである。

このAIエージェント機能を自分自身や社内で使いこなせるかどうか、これからの業務効率、ひいては営業的価値を生み出す大きな力になるだろう。

第二の次元：移動産業の現場での実装

第二の次元は、我々の主戦場である「移動産業の現場」での実装だ。

SNSでの情報発信の自動化やマーケティング素材の収集といった分野でのエージェント活用はもちろんだが、私が最も力を入れてきた静岡TaaSの共同配車業務は、現在、システムオリジン（海野知之社長、静岡市清水区）に委託した「静岡配車センター」で行われている。

ここはまさに、地方タクシー業界における「AI配車」の最前線の実験場になろうと





第三の次元は、国家や文明のレベルだ。ここには、日本復活の大きなチャンスがあると感じている。今年7月、半導体の巨人であるNVIDIA（エヌビディア）のジェンスン・ファンCEOが来日したが、その時の彼の振る舞いには本当に感動させられた。

同社が創業期に倒産の危機にあった際、当時のセガが多額の資金援助をして救っ

している。

これまでのスマホアプリを使った配車にとどまらず、AI自動音声による電話受注の無人化が視野に入ってきた。さらには、天候や曜日、時間帯、地域のイベント情報などのビッグデータに基づき、リアルタイムに需要を予測し、限られた車両と乗務員を最適に配置して供給をコントロールすることも期待される。長年、このコラムでも描き続けてきた「地域最適配車プラットフォーム」がいよいよ現実のものとして動き出そうとし

第三の次元…日本の復活とAGIの未来

ているのだ。

高齢化が進み、地域の足の確保が急務となる中で、業界最大の課題である乗務員不足に対し、ただ嘆くのではなく、AIの力で現場の生産性を極限まで引き上げ、地域社会を守っていく。技術が追いついて自動化が進む今だからこそ、我々人間がお客様にどう寄り添い、血を通わせるかが問われる正念場である。

たという歴史がある。台湾出身のファン氏は、世界トップ企業の頂点に立つ今でもその恩を忘れず、公の場で深く頭を下げて感謝を伝えた。

「受けた恩は石に刻む」というような、東洋的な義理人情の厚さに、思わず胸が熱くなった。

彼が東京・神田の居酒屋で、日本の錚々たるトップ経営者たちと膝を突き合わせて語り合い、日本政府の最先端プロジェクトや、日本独自の「ソブリンAI（国内主導の国家主権型AI）」構想である「ノエトラ」（ソフトバンク、NEC、ソニーグループ、ホンダなど国内44社が出資し、経済産業省の支援を受けて始動した国産AI開発の新会社）への全面協力を約束したのも、この深い「恩義」と信頼があったからこそだろう。

米中の覇権争いが激化する中、日本が持つ「ものづくり」や「ロボティクス」の力を活かした「フィジカルAI（現実空間で物理的に稼働するAI）」の領域ならば、日本は再び世界と勝負できる。そんな「AIジャパン」の明るい希望

を抱かせてくれた。

AIがこのまま進化を続ければ、いずれ人間の能力を遥かに超えるAGI（汎用人工知能）の世界がやってくると言われている。

SF映画のようなディストピア（暗黒社会）を心配する声もあるが、私は「ユートピア」になると信じている。なぜなら、AGIは単に知識や計算能力が高いだけでなく、政治的・倫理的な面でも進化し、人間の持つ「他者を思いやる心」や「利他の精神」といった、最も良き部分が昇華され、結晶化された存在になるはずだからだ。

2026年は、その素晴らしい世界への第一歩となる年だ。

静岡Taasグループの力は微力かもしれない。しかし、自分たちの領域、自分たちの戦場である「地域の移動」において、このAIの飛躍的な発展を少しでも取り込み、人々の暮らしを豊かにしていく。その決意を新たに、激変の波の真つ只中へと力強く漕ぎ出していきたい。

（2026年7月26日記）



← サイトへGO!

運転の仕事.jp

9:00 から 21:00 お問い合わせ受付中 ▶▶



0120-84-8284

タクシー専門求人サイト!



運転のおしごと



80%以上が未経験者からの応募! タクシー経験のない人にも分かりやすくサイトで紹介!